

立山のヒミツ

富山平野からいつも変わりなく見える立山連峰ですが、実は目には見えない、ある「ヒミツ」が隠されています。立山周辺の地下には、正体不明の「巨大な何か」が存在するのです！

立山連峰を含む飛騨山脈ひださんみゃくの西側（富山県側）と東側（長野県側）で地震波じしんはを観測すると、ふしぎな現象げんしょうがみられます。地震の波が山脈の下を通過するとき、その波が非常に小さく（弱く）なってしまいます。また、特別な測定器で重力を精密せいみつに測ると、立山周辺では富山平野などと比べて、重力の値が小さくなっているという結果がでています。

このような現象げんしょうは、巨大な活火山の周辺で、よくみられることが分かっています。活火山の地下には「マグマだまり」と言われるマグマの貯蔵庫ちよそうこがあります。マグマは液体で、まわりの岩石よりも密度みつどが小さいという性質があり、このような性質が地震の波を弱くしたり、重力を小さくさせると考えられています。

立山もおよそ4万年前までは活火山ふんかに噴火を繰り返していました。そして今でも、地獄谷じごくたにで火山ガスを盛んに吹き出している活火山（弥陀ヶ原火山とも呼ばれる）です。では立山周辺の地下にある「巨大な何か」は「大きなマグマだまり」なのでしょう...？

それはまだハッキリと分かっていません。というのも、立山周辺で観測される地震の波が弱まる度合い、重力の値が小さくなる度合いは、ただの「マグマだまり」では説明できないほど大きいのです。立山周辺でふしぎな現象げんしょうを引き起こすものの正体について、現在考えられている有力な説には次のようなものがあります。①水を大量に含んだマグマ、②水を大量に含んだ無数の細かい穴があいた岩石、③1と2の組み合わせだったもの、などです。

金沢大学のグループの研究によると、最大で東西14km、南北28km、中央部の厚さ約4km、体積およそ1000立方キロメートルにもなる「巨大な何か」が立山を中心とする飛騨山脈ひださんみゃくの地下数キロメートルの所に存在すると推定されています。

今はまだこの「巨大な何か」の正体は正確に分かっていませんが、将来には様々な調査が行われて、この「立山のヒミツ」が解明されることでしょう。



科学博物館の屋上から眺めた立山連峰...この山々の地下に何かがある！

(2012年2月 田中 豊)